飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥地域調査一覧

1995年度に飛鳥地域では、次の８件の調査を実施した。それぞれの調査成果は下の一覧の概要欄に略記したが、このうち水落遺跡の調査（第８次）と奥山久米寺の調査（1995-１次）については項を改めて報告する。

調査次数	調査地区	面積	調査期間	概　　要
水落遺跡 第８次	5AME-Q	510m²	95.７.３ ～10.16	（本文記載）
水落遺跡 1995-１次	5AMD-N.U 5AME-P	34m²	96.３.18 ～３.27	飛鳥寺北限の溝、水落遺跡全体に及ぶ掘り込み地業の北端と南端、土坑などを検出。
飛鳥寺 1995-１次	5BAS-K	21m²	95.７.７ ～７.13	飛鳥寺講堂の東北。土坑３基などを検出。飛鳥寺Ⅲ型式の軒丸瓦など出土。
飛鳥寺 1995-２次	5BAS-P	10m²	95.７.13 ～７.18	飛鳥寺講堂の北方。16世紀以前の東西溝を検出。飛鳥寺ⅢおよびⅩⅣ型式の軒丸瓦など出土。
橘寺 1995-１次	5BTB-B	91m²	96.１.９ ～２.14	川原寺南参道～橘寺北門間。７世紀後半の橘寺北限の塀と溝、奈良時代の橘寺参道側溝を検出。川原寺の緑釉水波文塼出土。
奥山久米寺 1995-１次	5BOQ-H,J,K	298m²	95.９.11 ～11.10	（本文記載）
坂田寺 1995-１次	5BST-A,E,F	58m²	95.11.27 ～12.15	（本文記載）
川原寺 1995-１次	5BKH-E,F	37m²	96.３.４ ～３.14	西渡廊の基壇南辺縁石、西金堂の約50m西で棟門と推定される礎石などを検出。前者は創建時、後者は鎌倉期か。

飛鳥地域調査一覧

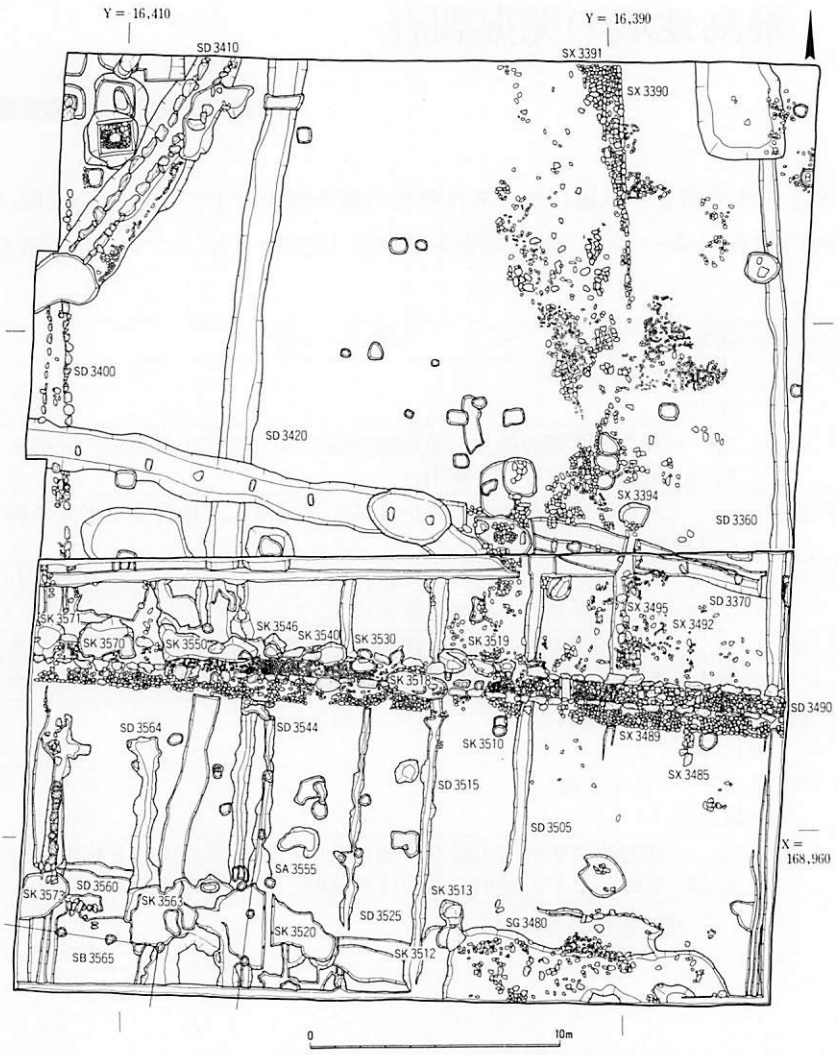
水落遺跡の調査（第８次調査）

当調査部では水落遺跡の範囲と周辺の遺構、飛鳥寺西方に広がる遺跡の構造と水落遺跡との関係を解明すべく、1994年から３ヶ年の計画で史跡指定地東南部の調査を進めることになった。第８次調査は、その２年目で、前年度の第７次調査区の南側部分を対象に実施した。第７次調査では、水落遺跡の南限・東限に関する遺構は検出されず、遺跡の範囲は更に調査区外に広がること、調査区内は水時計に水を供給したと推測される大規模な石組斜行溝SD3410や木樋暗渠等の水路はあるが、漏刻台と関連する建物はなく石敷広場になっていること、等を明らかにした。

遺　構　検出した遺構は、７世紀と平安時代に大別できる。

７世紀の遺構　後世の撹乱部分を除き調査区のほぼ全面に石敷痕跡とみられる不整形な小さいくぼみが確認され、本来は全面が石敷であったと考えられる。SX3492などの石列はそのなごりである。こうした石敷・石列のほかに石組溝（SD3490・3400・3560）、木樋暗渠SD3370、池状遺構SG3480などがある。

SD3490は調査区北辺を東南東から西北西に向って流れ、西で北に約５度偏する方位をもつ。南側に幅約0.8mの玉石の石敷帯SX3489を伴う。溝は９世紀に改修を受けている。第７次調査で検出したSD3400は、７世紀代では最も古い遺構であるが、後世の削平のため極めて残りが悪く、部分的に検出したにすぎない。調査区東南部で検出したSG3480は、自然石12個を弧状に配したもので、石列は南側に面をそろえる。この石列の南1.7mから始まる浅い掘り込みがあり、更に南へと広がり、両者一体で池と考えている。この池に接続する石組溝がSD3560である。



水落遺跡第７・８次調査遺構図

平安時代の遺構　素掘り溝(SD3360・3420など)、大小の土坑（SK3510・3520など)、掘立柱塀(SA3555）等がある。調査区中央東寄りにある小土坑SK3510は径0.5m程の円形の掘形で中に、次に述べるような状態で土器が一括投棄されていた。底に須恵器の甕腹片を敷き、その上に丹波篠窯産の須恵器の鉢を正位の状態で据え、中に土師器小皿８枚以上、杯３点、鍔釜片、黒色土器Ａ類の大小の椀各２点を納め、それらの上に石を２個置いていた。土師器の杯・皿・黒色土器の椀は、完形品であるが、須恵器の鉢はもともと体部の一部を欠損したものを使っている。出土土器類は、天禄四（973）年に焼亡した薬師寺西僧房の床面に残されていた土器類（『薬師寺発掘調査報告』pp.149～155、pp.256～267）と共通する。

遺　物　土器・瓦・金属製品・銭貨・石製品等がある。北に隣接する石神遺跡では７世紀代の土器が大量に出土しているが、水落遺跡ではこの時期の土器は極めて小量である。遺跡の性格の違いを反映するのであろう。土器の大半は、再びこの地に開発の手が入った平安時代のものであり、９世紀後半代から10世紀後半代に属する。

小　結　今回の調査でも、水落遺跡の南及び東を画す施設は検出されず、遺跡は更に南と東に広がることが明らかになった。

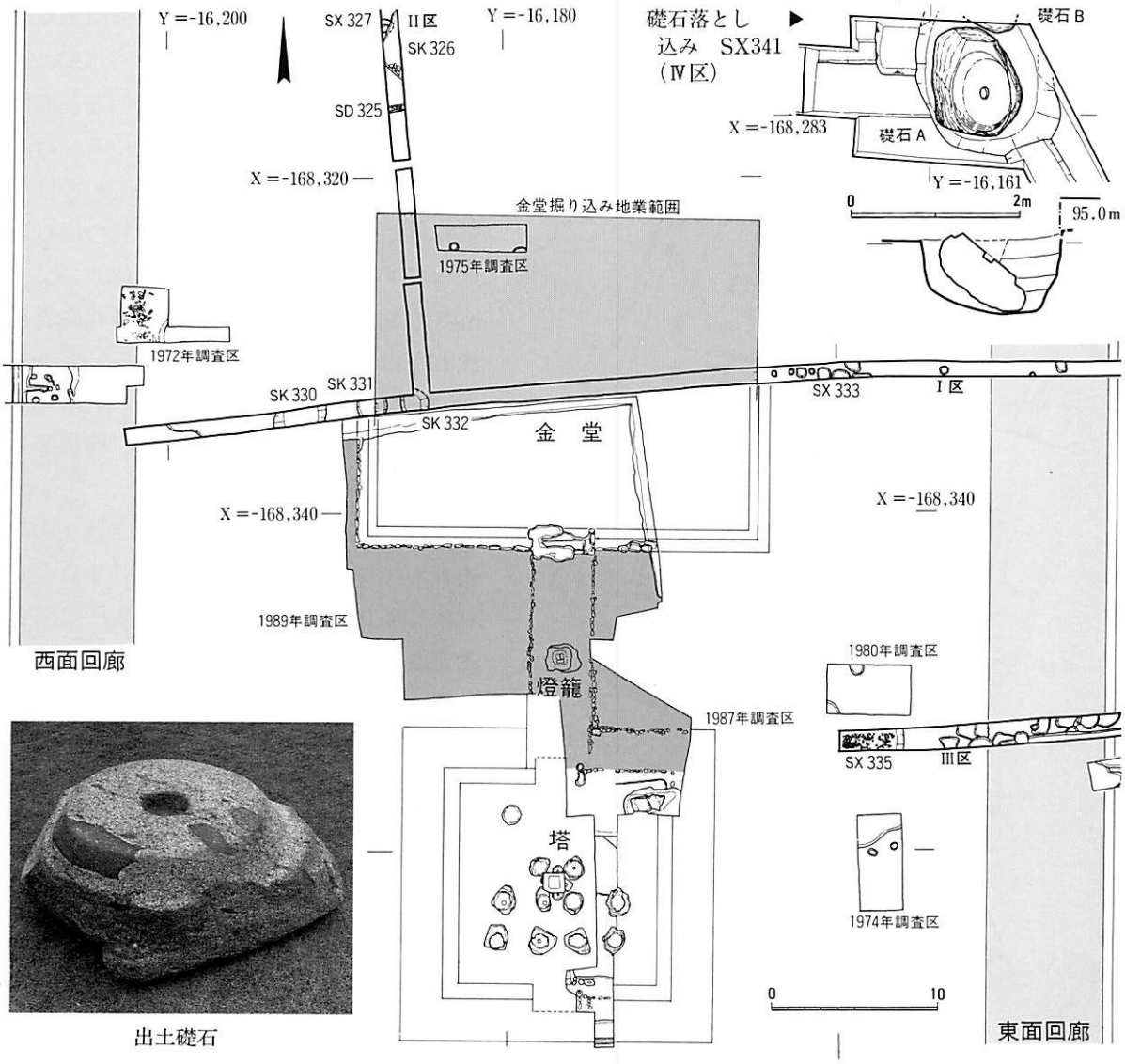
一方、新たに石組斜行溝SD3490、池状遺構SG3480、およびSG3480の余水を流したとみられる石組溝SD3560などを検出した。二条の溝は、水落遺跡中心区画よりも古い南北石組溝SD3400（石神遺跡Ａ－３期併行期）を切って造られており、中心区画と同時期もしくはそれ以降の時期と考えられる。また第７次調査でも中心区画と同時期と考えた石組斜行溝SD3410・木樋暗渠SD3370を検出したが、今回の溝とは方位を異にし、調査区外で重複する位置関係にある。いずれも年代を決定できる遺物の出土が乏しく、これらの遺構の先後関係は今後の調査にゆだねる。また池状遺構SG3480も調査区の南へ広がっており、その範囲と性格付けについても次年度以降の調査を待つ。

奥山久米寺の調査（1995-１次）

この調査は、公共下水道本管埋設にともなう事前調査である。奥山久米寺（奥山廃寺）についてはこれまでの調査によって、７世紀前半に造営された四天王寺式伽藍配置の古代寺院であることが推測されている。今回の調査はＩ区からＶ区まで幅の狭いトレンチ調査ではあるが、中心伽藍各所に及んだ。以下、主要なものに限って述べる。

Ⅰ・Ⅱ区　金堂跡にかかる調査区である。Ⅰ・Ⅱ区の交点付近を中心として、金堂の掘り込み地業を検出し、地業の北・東・西の端を確認した。地業は、東西22.9m・南北19.1mに及ぶ。版築層は残りの良い所で厚さ70cm残っており、厚さ８cmほどの層を12層識別できた。しかし、基壇外装や基壇周囲の化粧は全く残っていない。1989年の調査によって、金堂基壇の東西幅を23.4m（80尺）、南北幅をと約18m（60尺）と推定してきたが、今回の調査によって、東西幅についてはそれがほぼ確実となった。南北幅については、掘り込み地業の南北幅が19.1mと判明し、推定値より広くなる。そうすると、基壇の規模は、川原寺中金堂の東西約24m、南北19.2mとほとんど同じに復元できよう。

Ⅳ区　東面回廊北端推定地から講堂推定地の北側にかけての調査区である。東面回廊と北面回廊推定地は近世以降の土坑や削平のため、その痕跡は見いだせなかったが、講堂推定地に隣接して講堂所用



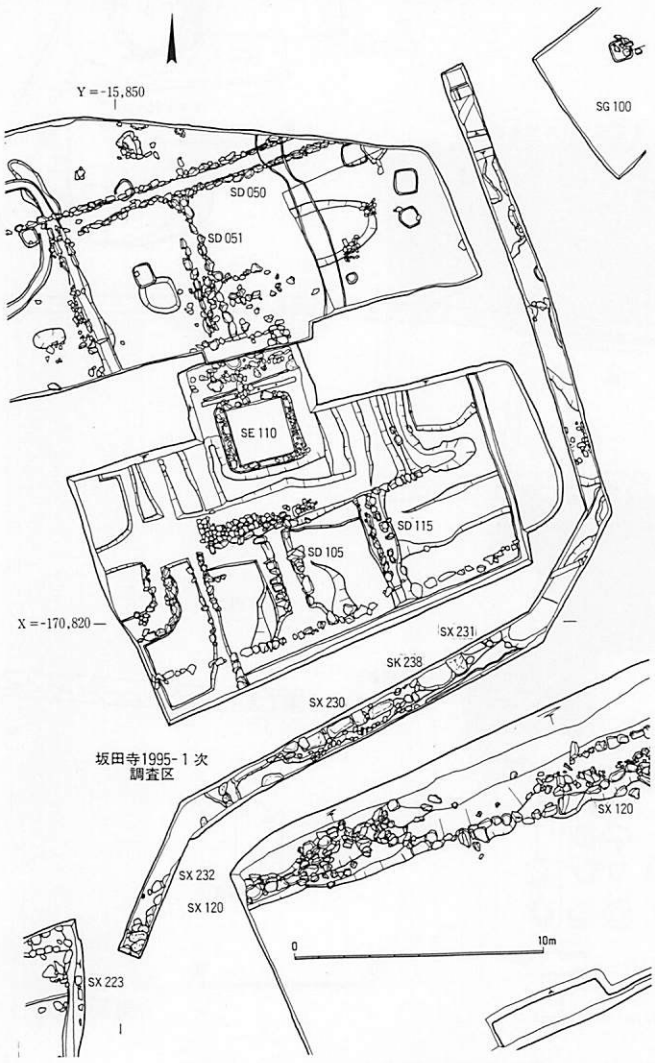
奥山久米寺1995-1次調査遺構図

と見られる礎石を発見した。SX341は、講堂推定地の東北角に位置する礎石落とし込み穴である。東西1.7m・南北1.6m以上の南北に長い楕円形の穴で、検出面からの深さは約1mある。中に花崗岩製の礎石2個が落とし込まれていた。うち1点(礎石A)を取り上げた。礎石Aは、直径1.2m、厚さ0.5m、中心からやや外れたところに下径96cm・上径78cm・高さ12cmの円形柱座をつくる。柱座の中央には径20cm・深さ7cmの円孔がある。柱座の上面の直径60cmほどの範囲には敲打痕が残り、柱径に対応するのであろう。礎石BはAに比べてやや小型であるが、やはり柱座の中央に円孔がある。礎石Aは身舎用、Bは庇用の可能性がある。

これまで、講堂の存在については地割り痕跡だけが推定の手がかりだったが、礎石の発見はその存在を裏付け、Ⅳ区の南側に講堂を想定して四天王寺式伽藍配置とみることは、さらに妥当性を増したと言えよう。

坂田寺の調査（1995-1次）

下水道敷設にともなう事前調査で、かつて実施した第1・2次調査区の中間にあたる。これまでの調査によって、奈良時代の遺構として、西面する礎石建ちの仏堂とそれに取り付く東面回廊、南面回廊が確認され、回廊は一辺58mほどで方形に巡ると推定されている。今次調査はその回廊で囲まれた一郭の北側にあたる。今回検出した遺構は、石垣SX120・230・231、石列SX232である。石垣SX120は、第2次調査南区で検出した西延長部で、人頭大から一抱えほどの花崗岩玉石を積み上げている。SX230・231はこれと平行する石垣で、長さ1m以上の花崗岩の巨石を並べている。石列SX232はSX120の北1.5mのところにあり、径50cmほどの花崗岩自然石を南側に面を揃えて並べている。SX120北側の石組溝側石の可能性がある。



坂田寺1995-1次調査遺構図

遺物は大量の瓦のほか、土器、金属製品、凝灰岩切石片などが出土した。

文献史料によれば坂田寺は司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来し（『扶桑略記』欽明13年10月13日条）、創建は6世紀末と推定され、平安時代まで存続が確認できる。坂田寺は傾斜地に立地し、旧地形を平坦にして伽藍を造成している。今回検出した石垣SX120・230・231は、奈良時代の伽藍中心部北側の斜面に設けられたもので、整地土の土留めの役割ももっていたのであろう。SX230と231はともに裏込め土に瓦を含くんでおり、南側に7世紀の瓦葺き建物の存在を予想させるが、しかし今のところ創建時に遡る坂田寺の遺構は未確認であり、今後の課題である。（寺崎保広）